堀川のこと

堀川は、自然にできた川ではありません。
大昔、名古屋のまちを発展させるために人の手によって作られました。

船で人や木材、食べ物、生活に必要な食材を運ぶなど、
堀川のおかげで名古屋のまちは今のように発展することができました。
そんな堀川を、名古屋のまちの人たちも大切に育てました。
子どもたちが泳いだり、魚を捕ったり、花見や舟遊びをするなど、
名古屋の人たちにとって堀川はなくてはならない川でした。

でもトラック輸送が成長して、堀川の手を借りなくても
人や物を運ぶことができるようになると、堀川への関心はうすれ、
みんなだんだん堀川のことを大切にしなくなりました。
汚れた水を流したり、ゴミを捨てるようになったのです。
堀川は人が作った川です。
だから人が大切に育てていかないとすぐに弱ってしまいます。

やがて、そんな弱った堀川に心を痛める人が少しずつ増えるようになりました。
ここまで大きく名古屋のまちを育ててくれた堀川を、
みんなに親しまれてにぎわっていた頃のように
いきいきした川に戻してあげたい。

まちが発展して人々の生活も大きく変わるなかで、
堀川と名古屋の人たちとの新しいかかわり方が、いろいろと模索されています。
堀川は人が育てた川であり、名古屋を育ててくれた川でもあります。
そんな堀川を、これからどのように育てていくかを考えることは
名古屋で生活する私たちにとって、とても大切なことなのです。

発行：堀川まちづくりの会
（事務局：名古屋市緑政土木局河川計画課）
監修：堀川文化探索隊、堀川文化を伝える会

名古屋のまちを育てた川

堀川探検 BOOK

いつもそばにある
堀川まちづくりの会

堀川の誕生と成長

堀川ができた理由を知ってるかな？

時は1610年（慶長15年）、徳川家康は豊臣方との戦争に備え、名古屋台地の上に大きなお城とまちをつくるよう命じました。このとき、清須からまちぐるみの引っ越しが行われ、名古屋のまちが生まれました。この引っ越しを「清須越し」とよびます。

まちでたくさんの人が生活するには、米や野菜、魚や塩など、いろいろな物が必要です。当時は一度に多くの物を運べるのは船しかなかったので、お城と熱田の海岸をつなぐ川が掘られました。こうして堀川が誕生したのです。

福島正則が語る
「堀川と名古屋のものづくり」
名古屋市中区HP

徳川家康

福島正則

わしは家康様から堀川を掘るよう命ぜられたのじゃ

海に向かって伸びていった堀川

堀川がつくられたころ、熱田の前は一面の海が広がっていました。

江戸時代は農業が中心だったので、尾張藩や豊かな町人は、取れる米を増やすために、海だった所を干拓して新田にしてゆきました。

また、明治になると、海を埋め立てて工場などをつくりました。そのために、海は熱田からだんだん遠くなり、堀川も海に向かって伸びていったのです。

埋め立てと干拓はどう違う？

埋め立ては海を仕切って、土で埋めて土地を作るのに対し、干拓は海を仕切って排水して土地を作ります。

まちにおいしい飲み水を送った御用水

名古屋城や堀川ができて約50年後の1663年（寛文3年）、庄内川から名古屋城のお堀まで水を運ぶ「御用水」が完成しました。

御用水の水はお城のお堀に入り、水路を通って堀川に流れこんでいました。お堀の水を木の升や樋などを使って各家に配水する「巾下水道」がつくられたことで、堀川の西のまちでもおいしい飲み水が手に入るようになりました。

堀川の歴史について
詳しく知りたい人におすすめ
名古屋堀川ライオンズクラブHP
（堀川の資料集）

堀川なのに黒川？

1784年（天命4年）、水害からまちを守るため、大幸川の流路を変えて堀川につなげられました。そこから約100年後の1877年（明治10年）、犬山と名古屋をつなぐ川をつくって船で人や荷物を運んだり、農業用の水として利用するための大規模な工事が行われました。この工事で、新しく作られた川と堀川がつなげられて、現在のような形になりました。名古屋城より上流の堀川は、工事を担当した技師の黒川治愿の名前にちなんで、今も「黒川」と呼ばれています。

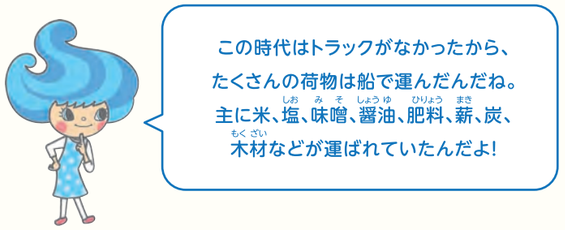
黒川治愿

右が黒川で左が御用水／1971年（昭和46年）
木津根橋付近の風景

History of Horikawa

江戸 1603年～

江戸時代、名古屋城下には武士や町人など、9万人くらいの人が住んでいました。堀川は海路で運ばれてきた荷物を船でまちまで運ぶためにとても大切な川でした。



当時、一番大事な農作物は米でした。米は年貢として納められ、その米を保管するための蔵が、現在の納屋橋と朝日橋のあたりにありました。

納屋橋の下流には26棟の蔵が立ち並び、7万3千石の米を保管できたといわれています。

「廣井官倉に貢米を納る図」　『尾張名所図会』

当時河口近くだった白鳥には、飛騨や木曽の山から切り出された材木がたくさん保管されていました。江戸へと売られたこの木材は「尾州材」と呼ばれ、質の良いことで評判でした。

いろいろな荷物が運ばれる堀川ぞいは、商人のお店が並び、お祭りや舟遊びをしたりして、とてもにぎわっていました。

今の日置橋西北付近からの風景　『桜見与春之日置』（名古屋市博物館蔵）

明治 1868年～・大正 1912年～

尾張藩がなくなり、名古屋は地方都市に変わりました。その頃、まちの人たちは、重い年貢や、物の値段があがったりして苦しんでいました。

弱った名古屋のまちを元気にするには、新しい産業をつくり、農業、商業を活発にする必要がありました。

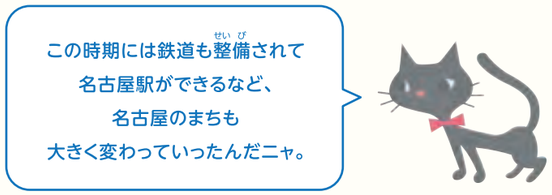
そこで、木曽川と堀川を水路でつないで、犬山から名古屋まで船で荷物を運べるようにして、農業用の水も確保するという壮大なプロジェクトが計画されました。

この大事業を担当したのは、愛知県技師になったばかりの29歳の黒川治愿でした。8年の年月をついやしてこの工事は完成し、木曽川と名古屋が一筋の流れで結ばれたことで、この地方の発展の基礎ができたのです。

当時の人たちの努力で、名古屋のまちが城下町から産業都市へと発展すると、堀川の役割もますます重要になっていきました。

混雑する堀川 明治43年（愛知県写真帖）

しかし、堀川だけで増え続ける荷物を運ぶのは限界でした。そこで、新たな水路と大きな船が入れる港が強く望まれました。そうしてできたのが、新堀川と名古屋港です。



名古屋港には、北海道やアメリカなどからも原木が運び込まれるようになり、大正になると堀川の河口は木材で埋め尽くされ、船の通り道もなくなるほどでした。

また、城下の人口も急激に増えていきました。明治4年に約8万人だったのが大正9年には43万人もの大都会となっていたのです。

昭和 1926年～

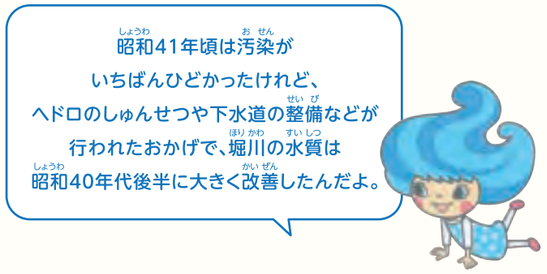
産業がすごい勢いで成長して、港から市内へ荷物を運ぶための運河が、堀川と新堀川だけでは足りなくなったため、道路と運河を増やす計画が立てられました。

最初に取り組まれたのは中川運河でした。港から名古屋駅までのび、堀川ともつながる計画で昭和7年に完成しました。

完成間近の松重閘門（名古屋市市政資料館蔵）

昭和9年に、名古屋市の人口は100万人を超え、まちが発展し、生活が豊かになるにつれ堀川は汚れていきました。

そこで、堀川・新堀川・中川運河をきれいにする計画がつくられ改善がはかられましたが、戦争が激しくなったため昭和15年に中止になりました。



戦争が終わり、昭和30年代になると、日本は高度経済成長の時代になりました。堀川や中川運河が船でにぎわうなか、トラック輸送も成長していきました。

これまで船で運んでいた大きな荷物をトラックで運べるようになると、船による輸送は減っていきました。

昭和43年には堀川と中川運河をつないだ松重閘門も使われなくなり、約350年もの間、名古屋のまちの発展を支えてきた堀川は、輸送路としての役割を終え、静かな水面となっていきました。

平成 1989年～・令和 2019年～

堀川をもう一度再生しようという構想がたちあがり、平成4年から、黒川地区・納屋橋地区・白鳥地区の川の整備が進められ、散策路や親水広場がつくられました。

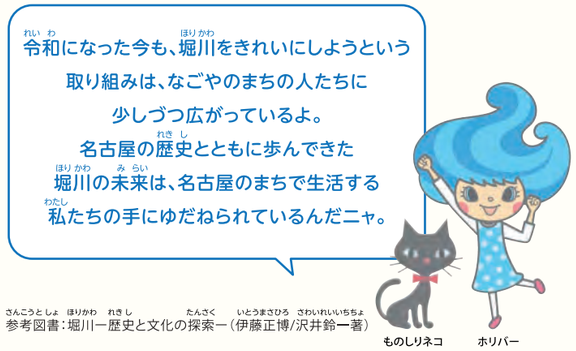
また、船着き場がつくられ、イベントなどで屋形船が運航されるなど、堀川と人とのつながりが少しづつ戻っていきました。

堀川の水質は大正時代から悪くなりはじめ、昭和40年代後半に大きく改善しましたが、それ以降はあまりよくなっていませんでした。

平成10年から地下鉄工事で湧き出た水が堀川へ放流されるようになると、猿投橋よりも上流は清流のように透き通った水が流れるようになりました。

堀川に流れ込む地下鉄工事の地下水

この放流は平成13年で終わりましたが、せっかくきれいになった環境を守るため、庄内川の水や地下水などを堀川に流す取り組みが行われています。



参考図書：堀川ー歴史と文化の探索ー（伊藤正博/沢井鈴一著）

History of Horikawa

探検してみよう！ 堀川MAP

堀川にプールがあった？

明治44年に矢田川の伏越（川のトンネル）が、木製から頑丈な人造石づくりに直されました。そのとき、伏越の出口に堀川と庄内用水に水を分けるための池がつくられました。プールがほとんどなかった時代、この池は子どもたちにとって格好の遊び場となり、「天然プール」と呼ばれてにぎわっていました。

子どもたちが水泳に興じる天然プール（昭和10年頃）

堀川にも滝がある？

昭和6年～8年にかけて、猿投橋から朝日橋の約2.9kmの区間で、川底を3m～4m掘り下げる工事が行われました。工事は、水害から地域を守るために行われ、曲がった川をまっすぐにして、川の幅を広げる工事も一緒に行われました。これにより、猿投橋のところに落差ができて滝のようになったのです。

猿投橋付近の落差工

松重閘門って何？

堀川は潮の干満の影響を受けて水位が変わりますが、中川運河は港に設置された中川口通船門と松重閘門によって水位を一定にしています。堀川と中川運河の水位差は大きい時は2m以上あり、二つの運河を船が行き来するためには水位を調整する必要がありました。松重閘門はその水位調整を行うための施設でしたが、現在は地域のシンボルとして親しまれています。

閘門の仕組み
（中川運河、堀川の魅力再発見プロジェクト）

白鳥に大きな貯木場があった？

名古屋国際会議場・白鳥公園・白鳥庭園は、平成元年に開催された名古屋デザイン博覧会をきっかけにつくられました。ではそれ以前はどんな場所だったのでしょう？ なんと、それ以前は現在のような陸地ではなく、御船蔵（水軍の基地）や木材を保管しておく場所として使われていたのです。

白鳥貯木場（昭和55年）

堀川にシャチがやってきた？

平成12年、堀川の白鳥橋周辺までシャチが遊びに来ました。この地域でシャチが確認されたのは、1815年（文化12年）に熱田の海で捕獲されて以来のことでした。白鳥周辺でしばらく過ごしたシャチは、「海へお帰り作戦」で多くの市民に見送られ、海へ帰っていきました。

シャチをひと目見ようと集まった市民の皆さん

堀川の水は、ほとんどが海水？

堀川の水は、最上流から庄内川の水を引き込んでおり、猿投橋より上流は全く海水が含まれていない淡水です。猿投橋より下流は海の満ち引きによって海水が上流側へ逆流するので、海水がたくさん含まれます。このように海の満ち引きの影響を受ける河川を感潮河川と言います。

頭首工って何？

頭首工というのは、用水路に水を引き入れるために川の水をせき上げる施設のことです。川の水をせき上げるためには川を横断するせきを設けなければいけません。しかし、大雨の時にせきがあると、水の流れを妨げて洪水の原因にもなります。現在の庄内用水頭首工は昭和29年に完成したゲート式ですが、それまでは、毎年簡素な仮ぜきをつくり、大雨で壊されると補修するということを繰り返していました。

庄内用水頭首工

堀川は桜の名所？

堀川はかつて、桜と桃の名所として多くの人でにぎわったと記録されていますが、実は現代でも知る人ぞ知る桜の名所なのです。黒川樋門のすぐ下流にある夫婦橋から名古屋城付近にかけて沿川は桜の木が立ち並び、春には名古屋随一といえるほどの桜並木を楽しむことができます。また、白鳥付近の堀川沿いも見事な桜並木が続きます。まだ行ったことがない人はぜひ、春の堀川を楽しんでみてはいかがでしょうか。

北区の御用水跡街園付近の堀川と桜並木

堀川の底は何色？

干潮時の堀川では、黒ずんだ川の底があらわになるときがあります。堀川は、市内から流入する水と名古屋港からの海水が、潮の満ち引きで行ったり来たりしているため、水中の浮遊物が時間をかけて川底に積もっています。川の底が黒いのは、微生物の働きによって、水中に含まれる鉄分が化学反応を起こして黒くなるためと言われてます。

黒く見える堀川の川底

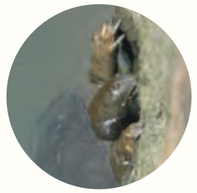
堀川にはどんな生き物がいる？

堀川は全長約16kmほどの川ですが、上流から河口にかけて、それぞれの場所で魚や、エビ、カニ、カメ、鳥、昆虫など様々な生き物が生息しています。堀川沿いを歩きながら生き物探しをすると思わぬ発見があるかもしれませんね。

アオサギ

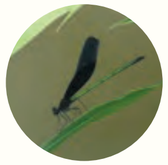
カワセミ

スッポン

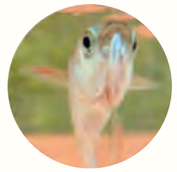


ハゼ

ハグロトンボ



ボラ



ドジョウ

コイ

ベンケイガニ

ウナギ